

# 総 括 報 告

東京大学医学部

井 上 英 二

本研究班の対象である心身障害の範囲を、初年度の研究報告書である「母子の健康と遺伝的要因に関する研究」より引用すれば、以下の通りである。

心身障害とは、「持続的な精神のおよび身体的ハンディキャップあるいは欠陥であって、先天性、すなわち生まれた時にすでに症状が現われているものか、あるいは発育が完了する以前、とくに生後の早い時期に症状が現われるもの」という、現象面からの境界を設定するのが適当であると思われる。この中、外傷や既知の感染症のように、遺伝的要因が関与する余地がほとんどなく、明らかな外因に基づくものは、当然のことながら、本研究の対象より除外される。

このような規準によって本研究の対象となる心身障害の中に含まれる数多くの疾患の病因は、比較的少数の遺伝的機構の何れかに求められるから、それぞれの遺伝的機構に基づく疾患群中では、共通性を有する予防対策を樹立することができる。

本年度の研究においても、その柱である5種の副課題の中の副課題1から3までは、代表的な三つの遺伝的機構に基づく疾患群のそれぞれに対応して研究を行なうものである。それらは、単一遺伝子の異常に起因する疾患を扱かう「遺伝生化学的・生理遺伝学的研究」、染色体異常に起因するものを扱かう「細胞学的研究」、および複雑な遺伝的要因によるものを扱かう「臨床遺伝学的研究」である。これらは又、それぞれヒトにおける分子、細胞、個体の各レベルにおける研究を意味している。さらに、人類遺伝学の一つの有力な研究方法を採用する副課題4「集団遺伝学的研究」と、以上の4副課題の成果を、実際に運営可能なシステムによって予防活動に応用する際の諸問題を研究する副課題5「遺伝性障害の予防システムに関する研究」によって、全体の研究班が構成されている。

以上の5副課題はさらに、19の細分課題によって構成され、これを担当する分担研究者の実数は18名である。細分課題によっては、分担研究者と研究協力者によって、いくつかの課題がとり上げられたものもある。

以上の構成に関しては、目次によってその鳥瞰を得ることができるであろう。そしてこの研究組織の立案は、主任研究者と4名の幹事で構成される幹事会によって行なわれ、この計画に基づく研究班の運営は、それぞれの副課題の代表者を兼ねる上記の5名が中心となって行なわれた。

本年度の研究成果が、巻末の議事録に記載されているように、新たに委嘱された2名の評価委員（井関尚栄，高原滋夫両氏）によって高い評価を受けたことは特記に値するであろう。この評価委員は、研究班内部における連絡および討論とは別個に、研究班の外部からその成果を評価し、以後の立案の資料とする目的で新たに設けられたものである。

日本の代表的な人類遺伝学とその関連科学の専門家が共同して、一定の目的を持った研究班活動を行なったのは、おそらく本研究班が最初であろう。しかしながら、将来の国民の健康水準の維持向上という目的は、いうまでもなく、一朝一夕にして達成されるものではない。この観点より、予定された3年間のこの研究班活動が終了した時点で、その業績が、その後の長期的な研究と予防の体制へ移行できるものであることがとくに重要である。以下に記載する分科会報告の中には、この長期的な体制の中で活用できる成果が少なからずふくまれているといえることができよう。

↓  
**検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用**  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります  
↓

本研究班の、対象である心身障害の範囲を. 初年度の研究報告書である「母子の健康と遺伝的要因に関する研究」より引用すれば, 以下の通りである。

心、身障害とは, 「持続的な精神的および身体的ハンディキャップあるいは欠陥であって, 先天性, すなわち生まれた時にすでに症状が現われているものか, あるいは発育が完了する以前, とくに生後の早い時期に症状が現われるもの」という. 現象面からの境界を設定するのが適当であると思われる。この中, 外傷や既知の感染症のように, 遺伝的要因が関与する余地がほとんどなく, 明らかな外因に基づくものは, 当然のことながら, 本研究の対象より除外される。